

令和7年度 八王子市立由木西小学校 学校経営報告

八王子市立由木西小学校 校長 植杉 義久

目指す学校像

「みんなの”好き”がある学校 ～人・場所・時間～」

【目指す学校像に向けた今年度の取組目標と具体的な方策】 ○・・・成果 ▲・・・課題、対応等

(1) 児童が学びへ意欲をもてる取組

ア 「分かった」「できた」を実感できる取組

○1年生から6年生までが年2,3回程度、前学年の算数の基礎学力の定着度を測る「ゆぎにしっ子ミニマム」を実施し、児童の実態に応じた手立てを打ち定着につなげることができた。「はちおうじっ子ミニマム」の効果を高める。

○学期に2回程度月曜日6校時に「ぐんぐんタイム」を実施し、児童自らが設定した学習目標と内容に取り組み自己調整力を養うことができた。

▲「ゆぎにしっ子ミニマム」の成果が「はちおうじっ子ミニマム」への成果につながっているか検証はできていない。この取り組みを継続し、検証していくようにする。また、児童の実態に応じて「ゆぎにしっ子ミニマム」の内容は修正していく必要がある。

▲「ぐんぐんタイム」の成果を広げ、深めていくために、次の段階への取組を検討する必要がある。

イ 他者との関りを大切にする授業づくり

○各教科、専科等全ての学習の中で目標達成の手立てとして話し合い活動を奨励し、実践していくことで、論理的に考える良さを実感した児童が81%になった。

○1人1台の学習用端末を活用した、学びの共有や学習のまとめの発表などを日常的に行っている実感を持つ児童が88%になった。

▲他者との関りや学習端末の活用が学力の向上とどのように関係があるのかより詳細な検証が必要である。

ウ 朝学習の取り組みの充実

○火曜日は読書、水曜日は学習用端末を活用したタイピング練習やドリルパーク、金曜日は言葉遊びに関する繰り返し学習といった内容を、児童の実態に合わせ実施したことで、児童は見通しをもちやすく落ち着いて取り組むことができた。

エ 「学校林」を活用した自然観察・体験活動の授業の充実

○学校林活用プロジェクトを発足し、プロジェクトリーダーを中心として様々な活用方法を「体験」「継続」をキーワードにしながら検討し、より児童が意欲的に取り組んだことで、新しいカリキュラムを2つ考えることができた。

○学習効果を高めるため、学校林を活用した「由木西レンジャー」を実施する場合は、内容によって月曜日5校時を60分授業の「由木西レンジャー・ジャンボ」としたことで、「由木西レンジャー」への参加率が

92%を超えた。

▲今年度は、用務主事だけでは対応できない大きさや量の倒木が多くみられた。来年度も安全に配慮しながら学校林の効果的な活用方法や巡回や保全活動も必要である。

オ 学校環境を生かした自然観察・体験活動の授業の充実

○たてわり班で行う「由木西レンジャー」で「農園・花壇整備」や「さつまいも栽培」、「落ち葉集めて腐葉土づくり」といった活動を、60分授業の「由木西レンジャー・ジャンボ」、15分授業の「由木西レンジャー・ミニ」と弾力的に展開したことで、この活動への参加率が95%を超えるようになった。

○5年生の米作り、4年生の麦栽培、1・2年生の杏・梅・栗の収穫、柿やキウイ、ブルーベリーやゆず等、伝統的に行っている食育活動の継続と新しい取組の検討を行うことで、給食や地域との連携を一層図ることができた。また、使用しなくなった学校プールの活用方法を検討し、始動することができた。

▲自然観察・体験活動を教育活動としてより充実させるために、特別活動と生活科・総合的な学習の時間の視点から見た活動の見直しが必要である。

カ 1年を通して、児童の図工作品が校舎を飾る取組の継続

○保護者のアンケートでは、校内ギャラリー等で子ども達の図工作品を鑑賞する活動などを通して、豊かな感性を育み、お互いの良さを認め合おうとする心情を育てていると100%の回答があった。

キ 読書活動の推進

○視野を広げ、語彙力を増やし、想像力を伸ばすため、地域の方の読み聞かせや図書委員会との連携を図りながら読書活動を推進したことで児童の81%が読書の楽しさを感じることができた。

ク 特別活動をきっかけとした主体性の育成と活躍の場の設定

○教育活動を支える委員会活動は、4年生からの参加としたことで意見交流が活発化し、常時活動や計画的・臨時活動を通して主体性を養うことができた。

▲児童の委員会活動への姿勢が指示待ちあるいは、例年踏襲が多いため、活動に期待感、躍動感がない。それぞれの委員会の存在意義や目標を明確にしてい取り組む必要がある。

(2) 安心安全を感じる環境づくり

ア 児童一人ひとりを見守る校内体制

○毎週火曜日の生活指導朝会や毎週水曜日に開催される「いじめ対策委員会」、年2回行う児童理解の会で情報を共有し、組織的な対応を行うことでいじめへの未然防止や対応について保護者から75%の回答を受けた。

○スクールカウンセラーによる全員面接を年2回実施し、児童の実態把握に努めたことで、児童や保護者からスクールカウンセラーとの面談を希望する件数が1.2倍に増えた。

○不登校児童や気持ちを整えたい児童用の教室として「ほっとルーム」を活用し、より一人ひとりの児童の状況に寄り添える校内体制を構築したことで、不登校児童数や不登校児童の欠席日数が減少した。

▲否定的な意見は16%（「分からない」）は含まない）あるため、今後も丁寧で迅速な対応を継続する。

▲別室指導を継続するための人員が必要である。

▲不登校児童の中で、VLPの活用をした例はまだない。

イ 豊かな心の醸成

○特別の教科道徳の時間やいのちの日の講話等を通して、人権意識の高まりを感じている児童が94%だった。

○異学年で構成したたてわり班で遊びや「由木西レンジャー」、朝サッカーの取組や休み時間の外遊びの奨励などを通し、下級生は上級生に憧れを、上級生は下級生を良い方へ導く自覚、異学年同士のつながりや仲間意識、思いやりの気持ちを育てていると感じている児童が94%だった。

▲6%の児童がアンケートに「分からない」と回答しているため、実感を感じられる取組が必要である。

▲全校の一部には言葉遣いに課題がある児童がいる。様々教育活動を通して豊かな

ウ 保護者や関係機関と連携した特別支援教育の充実

○特別支援教室「おおり教室」について、保護者や児童への理解教育実施だけではなく、保護者には理解啓発ビデオの上映、児童には映像資料を使った説明や体験授業を行ったことで、特別支援教育に対する理解が92%だった。

○月1回程度だけのこの会を開き、保護者の子育ての相談や本校の教育活動に関する疑問質問に答えることで特別支援教育の理解を図ることができた。

▲特別支援教室へのつながり方や相談の窓口などが明確ではない部分があるため、そこを改善する必要がある。

▲たけのこの会への参加者を増やしたり、新規の参加者の開拓をしたりすることで活動の継続を図る。

エ 安全教育の充実

○避難訓練の内容を火災や地震、火災からの地震や不審者対応、発生時刻の様々な設定を通して、災害から身を守る方法や留意点などを理解したと考える児童が100%になった。

○総合的な学習の時間における地域安全マップ作りセーフティ教室や薬物乱用防止教室、自転車安全運転教室等により自分の身は自分で守る意識を高めることができた。

▲110番の家を訪問する機会を持てなかった。次年度は時間を確保し、実際に駆け込んだり、家の人の話を伺ったりして緊急時に行動へ移せる訓練をする。

(3) 保護者、地域との連携

ア 学校運営協議会と連携した教育活動の構築

○竹の切り出しや地域歴史研修会の活動、PTAと協力した活動などを通し、学校運営協議会に対する保護者の認識がアンケートで98%になった。

○学校運営協議会やグリーンファミリーズが中心となり学校林や校地内の自然環境整備と保全活動、柿、ゆずといった植物の収穫と活用等を実施することができた。

○PTAと連携し登校の見守りや読み聞かせ、図書室整備や災害避難用備蓄品の管理、親睦行事などを実施することができた。

○地域行事に参加する教職員が増え、保護者・地域の方と共に語り、共に汗を流しあえる関係を構築することができた。

○本校の教育活動をホームページや学校・学年だよりなどで紹介していることを92%の地域・保護者の方が認識していた。

▲活動を継続していくための人員確保と責任者の明確化が必要である。

▲学校が送付するメールの既読数をあげるための方策が必要である。

イ 教育資源を活用した教育活動の充実

○畑見学や地層見学、国際理解学習や戦跡見学など地域の特色を生かした学習を進め、郷土に対する理解と愛着を深めることができた。

▲発達段階にあった活動の精選とキャリア教育と連携を図ることができる教育資源の発掘が必要である。

ウ 保幼小連携、鏈水小・鏈水中との連携を推進

○小中一貫グループ校である鏈水小学校、鏈水中学校と連携し、プレ中学生プロジェクトの取組や部活動体験、授業参観、児童・生徒の情報共有等を実施することで、連携に関する保護者の認識が98%となった。

○鏈水小学校とは小小連携の取組として、学校林観察やクラブ交流、児童まつりなどへの参加を通し、連携を強化することができた。

○年2回の保幼小連携の日を活用しながら、近隣幼稚園や保育園と連携し、幼児期の教育と児童期の教育を円滑に接続できるよう、情報の共有化を図ることができた。

▲鏈水中学校、鏈水小学校とは距離が遠いため限られた時間と回数の連携を有意義なものにするため、連携の目標を再確認し、より効果の高い取り組みを考えていく必要がある。

▲近隣の幼稚園との連携をより深めるため、情報共有だけではなく、保育観察や授業観察も実施できるようにしていく。

(4) 健全で向上心をもった組織の構築

ア 服務事故防止の徹底

○教職員に対して、学期ごとの研修や職員会議、管理職の定例連絡会後において周知を行うと共に、報告・連絡・相談の徹底を行ったことで服務事故ゼロを継続できた。

イ 校内研究主題「自ら学びに向かう児童の育成」を柱にした授業づくり

○国語科を校内研究の中心に据え、年3回の研究授業と協議会の実施、講師による2回の示範授業を通し、組織的に児童が自ら学ぶ姿勢の向上を図る授業研究を行うことができた。

○児童が自ら学びに向かうためには「児童に選択肢を複数持たせる」「児童の実態に応じた言語活動を行う」といった研究授業での成果を上げることができた。

▲校内研究の成果を他教科へ実践し、効果を高める意識の醸成が必要である。

ウ 教員・職員の専門性を生かした指導形態の工夫

○交換授業を行い、教員の専門性を生かしたことで、授業のおもしろさや楽しさを実感させることができた。児童の実態を複数で把握することができた。

▲交換授業を実施する教科や回数の検討をしていく必要がある。